

## オーストリア「皇太子」の日本訪問（4c）

フランツ・フェルディナント訪日日記  
《1893（明治26）年8月2日～25日》（その4c）

渡辺 肇

倉敷芸術科学大学院人間文化研究科

（2009年10月1日 受理）

### 8月20日、東京から日光へ（承前）

日本の劇場で上演される芝居の題材はたいいてい自国の歴史から取られている。その歴史は大名達の絶え間のない戦の中から無尽蔵な材料を提供している。激烈なる闘争、殺害、致命的な殴打、現在では風習ではなくなっている腹切<sup>はらきり</sup>などが劇的展開の極致を形成する。しかしながら、この様な表現を用いても良いとすれば、民衆の暮らしや民衆の生活も描写に欠けている訳ではない。芝居が長すぎたり、結末が悲しすぎたりすると、私への説明によると、随意に短縮してしまったり、他の舞台作品から個々の幕を挿入したりする。登場する役者達は男性だけであるが、女性の役をも声音や姿勢や動作や衣装で見事に再現するのに熟達している。

我々はいま上演された芝居の筋が余り理解できないと言う事を特に改めて強調する必要は無いだろう。恋人同士の激しい軋轢<sup>あつれき</sup>の中での役者達の動作や表情の動きから推測すれば、それは嫉妬物語の範疇<sup>はんちゆう</sup>に属していたのだ。明らかにその展開は非常に悲劇的に形成されている。というのは、観衆は明らかに感動していたからだ。特に女性の観衆には涙が浮かんでいたし、時には大きな啜り泣きを耳にしたからだ。

しかしながら、私に別れを告げる為に親王達や大臣達が姿を現している筈のかなり離れていた上野駅に行かねばならなかったのだ。間もなく芝居から退去せねばならなかった。

鉄道は北の方向に手入れの行き届いた土地を通り抜けて宇都宮まで伸びて行き、そこから北西方向に曲がり、日本人にとって神聖な場所である日光に到着した。利根川の岸辺より日光の直ぐ近くまで立並んだ杉並木は正に抜群のものであり、夜の暗さの中では蔭の様な輪郭を持ち、素晴らしい印象を持たせた。日光の神域に青銅の燈籠を寄進出来るほど金持ちではなかった一人の敬虔<sup>けいけん</sup>な男がこの並木を植えたとの事だ。我々が今日鉄路を一直線に進行してきたところを、徳川將軍の時代には日光に所在する家康の廟に幣帛<sup>へいはく</sup>を届ける為に、帝<sup>みかど</sup>の使者であった例幣使が例幣使街道を通って行ったのだ。

夜の11時に我々は日光に到着した。真夜中にもかかわらず大勢の野次馬が、駅から2キロメートル離れた日光ホテルまで蛇のようにくねって移動する殆ど終わりの無い人力車の車列を、驚嘆の眼差しで見っていた。日光ホテルは門前町から離れた、谷の特に狭くなっ

ている部分の、神苑に近いところにあり、我々を見事に歓迎する支度をしていた。

### 8月21日、日光にて

日本人は「日光を見ない内は結構と言う無かれ。」と言う。日光と言う言葉は太陽の輝きと言う意味だが、一般に言われている様に、光景を日本で最も魅力的に形成すべき総てのものを、自然は実際に提供している。この名前に意味するものは都市の集落ではなくて海拔およそ600mの火山の特性を有する山岳地域なのである。しかしながら日本人にとって狭い意味では大谷川の谷間の二つの村落を構成する市域、つまり鉢石と入町であると理解されている。そのうち前者は川岸に至るまで長く真直ぐ伸びた通りを形成している。

この地域の中心点として、また聳え立っている山々の中心点として、2,540m<sup>283</sup>の高さにまで日光山<sup>284</sup>とも呼ばれる男体山がそそり立っている。富士山と同じく日本の霊峰の一つ、であって、頂上に信者が登攀してお参りするのだ。水が稀なほど豊かである事が森の静けさを高めており、澄切った湖水が額縁に入れられた高地を再び反射する。小川が音を立てて谷に向かって、小さな滝を作りながら、流れている。小さな滝は25kmの範囲でおよそ30に達している。しかし景観に比較不能な程の彩り与えるのは山と谷を覆う豊かな植生であり、その完璧さとその厳肅なる真剣さに於いて谷間に高い荘厳さを与えている物凄い巨木、つまり堂々たる杉の木である。その荘厳なる地に古き日本で最も抜きん出ている二人、つまり偉大なる家康<sup>285</sup>とその孫の家光<sup>286</sup>が安らかに眠っているのだ。

素晴らしい自然に魅せられて英国人や米国人など多くの外国からの外交官たちが暑い季節を日光地域で過ごしているのだ、この門前町は避暑地ともなっており聖と俗が平穏に調和しているのだ。

残念ながら天候が芳しくなかった。この地域については生き生きとした色彩で描かれた案内書を読んでいて、その案内書は魅惑的な言葉で描写していたのだが、その魅力についてはほんの少ししか体験できず、実際のところ、何も見られなかった。川のように雨が降り、霧は山や森をベールで覆った様にして谷底にまで懸かっていた。まるで神聖なる場所が外国人の視線から逃れようと望んでいた様であった。その外国人は自己を犠牲にして信心しようともしないで見物して楽しもうとするだけであったからだ。しかし日光を日本の最高の地とするべく寄与したのは自然だけではなく芸術でもある。酷い天候にもかかわらず、それらの芸術作品を満喫することが出来たのだ。それで我々は朝早くから見物に出かけた。

最初にある魅力的な寺苑<sup>287</sup>に達し住職を庫裡から呼出した。住職は早朝の訪問に著しく驚いていたが、気持ちを落ち着かせて、3体の仏像を納める場所である三仏堂を開けた。この建物は我々が既に見てきた様な建物と非常に似ている。3体の非常に大きな寸法で金箔張りの仏像だけが抜群である。第一は千手観音、第二は阿弥陀仏、第三は馬頭観音であった。

より大きな関心をそそるのは三仏堂の外にある相輪様と呼ばれる円柱である。この円柱

は1643(寛永20)年に建立されたのであって、目的は邪悪なものの流入を寄付けない事であり、13mの高さの銅製の円筒形であり、その下部には2対の水平で直角に切断された梁によって交差されており、その梁はその末端で銅柱の下部を安定させている。円柱中部の上端は一連に重なって配置された蓮の花の形に作られた装飾が宛がわれている。その装飾には小さな鐘がぶら下っている。

枝が互いに触合<sup>とけあ</sup>ってかくも完璧<sup>アーチ</sup>に迫持<sup>かなめし</sup>の要石を形成している杉の木の屋根の下を歩いて、我々は家康の霊廟に向かった。厳かな木々の領域には深い静けさと荘重な安息が支配していた。それらの密生した針葉は太陽光線が浸透するのを殆ど許さなかったし、その直立して赤茶色の、幹周りがしばしば数メートルにわたる様な幹は、地面を覆っている柔らかかで淡緑色の苔と対象をなしている。多々賞賛されてきている自然の美を観たときには、しばしば失望させられる事があるが、当地では正に反対の効果が生ずるのだ。総ての案内書を読んだのにもかかわらず、私はこの著名な地域を覆っている巨木の影響力についてはそんなに素晴らしいとは想像してはいなかったのだが、これについては全く圧倒されてしまった。

既に767(神護景雲元)年<sup>288</sup>に勝道上人がここ日光に最初の仏教寺院を建立し、その事<sup>こと</sup>でこの地を神聖なものとして崇める基礎が築かれたのだ。しかし、偉大な將軍家康が<sup>かむ</sup>帝によって正一位東照大権現として神格化され、1617(元和3)年にこの地に埋葬されてから、日光はその本来的な意味を手に入れたのだ。社殿の施設は段庭の形に配列された建物と庭からなっており、階段と門で互いに繋がっている。二列になった杉の木の枝を通して8m以上の高さの花崗岩で作られた門<sup>289</sup>が我々の方にピカピカと光っている。そこに向かって幅の広い階段が上方に通じている。この門は筑前侯<sup>290</sup>が1618(元和4)年に自分の碎石場から切出した材料で建設したのだ。最初の庭では鮮やかな赤漆塗で輝いている仏塔<sup>291</sup>に目が魅了されてしまう。その仏塔は5層建で聳え立っていて、最下層の高さのところには十二支の動物で囲まれている。

若干の距離を置いて更に上方に向かう階段は仁王門<sup>292</sup>、つまり二人の王の門の意味であって見事に仕上げられており、その門の一部には獅子、虎、一角獣<sup>293</sup>、<sup>ばく</sup>猿と架空の動物が取付けられている。ここの動物たちは、一部は番人として、一部は他の神秘的な機能の為に、取付けられている。この門を出ると徹底的に赤に塗られた板壁で囲まれた社殿施設の庭に居る事となり、趣のある建物や、おびただしく大量の芸術的細部、色彩の華麗さ、生き生きとした動き、装飾の上品な静寂感が、織り成す調和の取れた作用によってまぎれもなく金縛<sup>かしば</sup>りになってしまう。端正な外観で抜群である三つの建物<sup>294</sup>の中の総てが家康の榮譽の為の宗教的式典に必要な事物と、更には將軍が用いる事物と、社宝が保管されている。他方豪華絢爛なもう1軒の建物は仏教の文書を収納している。1618(元和4)年からのものである貯水槽が一つあり、沐浴の為に充てられる清められた水を提供しているが、1個の花崗岩から加工されており、12個の花崗岩の円柱で静止している屋根で保護されて

いる<sup>295</sup>。

前面が石の欄干で閉じられていて階段で到達できる小さな庭には118個以上の青銅製灯籠がある。一個一個が芸術作品であり大名や他の高貴な寄進者からの御供えである。寄進者達の名前が灯籠に永遠に残されている。もっと多くの青銅製灯籠や燭台は、幾つかは朝鮮やオランダから由来したものであるが、その大きさと、豪華で芸術的な様式で注意を引付ける。

二番目の大きな社門、即ち陽明門を通過して我々は第三段目の庭に達した。この門は日本の建築技術と装飾技術<sup>すい</sup>の粋と呼ばれるに値する。ここではそれぞれの専門の名人達が、強烈なものと繊細なものを組み合わせたり、我々の驚嘆と感服を引起す様な永続する文化遺産を築く為に自分たちの時代の技量を掛けて、心を一にして協力しあったのだ。豪華に装飾され湾曲し金箔張りの竜の頭の上にある屋根は門を保護している。門は堂々とした円柱によって支えられている。それら円柱は小さな節度のある幾何学的な模様で覆われ、白く塗られている。円柱の柱頭は一角獣の頭を示している。他方、梁<sup>はり</sup>に沿って門をぐるりと竜の頭が伸びていて、中央部には2匹の竜の戦いが描き出されている。

この庭にある建物の一つは神楽舞<sup>かぐら</sup>の為の舞台を有している。もう一つの建物は護摩堂<sup>ごまどう</sup><sup>296</sup>であり、香を燃焼させる祭壇を有している。他方、第三の建物<sup>297</sup>は神輿<sup>みこし</sup>を収納している。この神輿は説明によると毎年6月1日に家康と他の二人<sup>298</sup>の神格化された偉大な男達3人の神霊を乗せて祝典行列であちこち回るのである。舞の舞台では1人の巫女が我々の前で深々と御辞儀をし続けた。恐らくは同僚と一緒に喜んで自分の芸を上手に稽古する準備が出来ていたであろう。しかし我々は既に奈良でその芸と接していたのだ。庭の周縁と壁は精巧に調製された石の浮彫で覆われていた。

支那門、つまり唐門を通過して我々は本殿に近づいた。その観音開きの戸は金箔張浮彫の唐草模様で装飾されていた。多くの神官に導きられて、靴の上に更に羊毛のスリッパを履いて、神殿の内部に足を踏み入れた。両側には次の間があった。それらの次の間は見事に仕上げられた木彫、金地の上に描かれた絵画、豪華な装飾でもって素晴しかった。神殿の拝殿は非常に簡素に保たれていて、背面には御幣と鏡が収められている。というのは、家康の霊廟も同様であるが、1868（明治元）年<sup>299</sup>には政府の介入によって仏教の祭式は神道の祭式によって排除されたからである。それで祈祷室から仏教に用いられていた総ての用具や器具が除去されてしまったのだ。

拝殿を通過して本殿への経路があるのだが、本殿は金箔張りの扉で閉められていた。この正面扉に直面できて単なる旅人としてではなく国々を視察している旅行者が享受できる利点が明らかになるのだ。公的な性質を持った旅自身が齋<sup>いひ</sup>す幾多の不愉快な事を単なる旅人なら何度も耐える必要は無いだろうが、拝殿<sup>のぞ</sup>を覗く事は厳重に禁止されている。これまで、どの外国人もこの最も神聖な部屋に足を踏み入れた事はない。しかし私の前で戸は開かれたのだ。私は次の二つを告白する。まず、この事が私にとって特別の満足となった事、ま

た、実際に今までヨーロッパ人の誰も許されていなかったし、ひょっとすると未来においても許される事はないであろう様な参観が出来たと考えて、今回の旅行を誇りに思う感情が私を捉えたと言う事だ。そして私は誠実なる友である三宮に対し次の事で一生涯感謝の念を忘れないであろう。つまり、三宮が私に対して当地に秘められている美術と空想の驚嘆すべき作品を解明出来る様に理解してくれた事をだ。

聖域は多くの部屋に分かれている。一つの部屋には金の御幣と金属製の鏡を納めた祭壇があった。ここにある仏教の見解を見事に比喩的に描写したものは布で覆われている。理解できる歴史的な関心を呼び起すのはそこに保管されている勇敢な將軍の甲冑である。その甲冑は非常に簡素に調えられていて黒い漆で覆われているが、今や神に高められた男を守ったのだ。戦乱の中で彼の家が権力を握る基礎を築いたのであるからだ。神官が何個かの提燈で秘密に満ちた暗闇に沈み込んだ部屋を照らすまで、我々は弱い蠟燭の光の下で質素な鉄の着物を注視した。我々の視線は見事な金箔張りの厨子<sup>ずし</sup> 300 に集まった。我々の前で神官達は土下座して遂にこの一種の聖櫃<sup>せいぐつ</sup>を開けた。その中で最後の覆いとしての1枚の幕の後に聖像があった。家康の坐像を描写した彩色像であった。この神像は誰に対しても全く宗教的な感動を起こさせる事は出来ない。しかしその為、この偶像を安置していた厨子や、壁面の装飾や、扉に現れている細工は私を全くの恍惚状態に陥らせた。遺憾な事だと私が感じたのは次ぎの事だけであった。この様な状況の下では、つまり、必要な照明が欠如したままでは、我々の眼前に現れた日本美術の至宝を詳細に検分するのが妨げられねばならなくて、それ故に私は全般的な印象で満足しなければならなかった事だ。ここで厨子や、壁面や、扉の装飾は彩色や、金箔張りや、彫刻でなされていて実際に浪費されている。示されている美術的な豊かさは主題やその完璧な描写の点で最初の瞬間には殆ど意味が混乱している様に見えるのだが、しかしながら、詳しく考察すれば完全な調和と快い静寂<sup>しじま</sup>で纏っているのだ。この国の歴史に殆ど300年に亘る軌道を示した事で人間として偉大で強力な事を果たした家康はここでは偶像として奇跡を成遂げたのだ。と言うのは、家康は自分への追憶を通してここで我々の目前にある非常に高度な美術の成果に感激させる事が出来たからだ。

我々は神像が納められていた場所から遺骨が安置されている所までゆっくりと歩んで苔で覆われた240段の石段を上の方へ登って行って、家康の墓の前に立つ。高い石の台座が將軍の亡骸を安置する青銅の骨壺を支えている。台座の前の石の祭壇の所に象徴的に焼香台、蓮などの花が付いた花瓶、亀の背中に立っていて<sup>くちばし</sup> 嘴の中に燭台として役立っている台を収めている大きな鶴、が置かれている。総てが立派な青銅製だ。石の柵が墓石を囲んでいる。入口は2匹の獅子<sup>しし</sup> 301 で警護された堅牢な青銅製の門を通っている。重大なのはこの場所が家康自身自ら永遠の眠りの場として選び抜いたと言う事と墓石の荘厳なる簡素さである。墓の足下に横たわっている社殿で賛歌に歌われている芸術はここでは聴かれない様に思われる。ここまで巡礼に上って来た人は死者に向けられた思いを造形的な装飾を

通して逸らすべきではないからだ。

我々はもう一度本殿にもどった。情緒豊かな作用を楽しむ為だ。神殿施設の建築構成に対する周囲の景観や荘厳な森林との調和がその様な作用を生み出すのだ。そして、この様な作用の魅惑が、強力な戦士の墓碑の上に広がる静けさによって、もっと高められる事になるのだ。その様な静けさに対して今日の雨は憂鬱な流儀でしょぼしょぼと降ったのだ。

我々が同じく訪問した寺宝は、同じ様式の他の部屋の様に、傑出した人々の供物であって、武器とか、甲冑とか、鞍具とか、行列の為の様々な用具とか、御経の巻物とか、更には50 m以上の長さのこの国の歴史や神話の絵物語とかである。特に言及に値するのは見違えるほど迫真的な鷹や風景が再現された古い掛物であって、この鷹は説明によると日本では現在でも行われている鷹狩りに由来するのである。以前には貪欲な僧侶達から金と甘言で、事実として甘言よりも金で、寺宝として保管されている個々の物を入手するのが可能であったようだ。しかしながら、この様な慣習化していた大規模な悪徳行為が衆目の目を集めるなった時に、寺宝の嚴重な在庫検査をする事でこの様な悪徳行為が制御される様になったのだ。

家康の墓を訪ねた後では、もはや他の二つの社殿は我々に同じだけの関心をそそる事は無かったので、じっくりとは観察しないで急いで通り過ぎた。

我々に挨拶した豪華絢爛な衣装を身に着けた東照宮の宮司<sup>302</sup>は、以前には北国の有力な大名であって帝と將軍の間の戦の際には將軍の側に身を置いたので、敗北し自分の領地を失ったのだが、恩赦が与えられ一種の恩給として与えられた伯爵の称号の外にこの神社の宮司の地位を授けられたのだ。

二つ目の廟所は家光の靈廟であって、一部は深く刻み込まれた谷に沿っており、一部は山の斜面に建てられているが、家康の墓所から遠くなく位置していて、ずっと地味に仕上げられているが、注目に値するのである。というのは、ここでは仏教が頑張り通していて、それ故に仏教の礼拝祭式を明白に必要とする完璧な設備装置が今も現存しているからだ。神殿の門の傍に配置されている番人はぞっとするような恐ろしい顔の堂々たる集団を代表している。我々はここでは一体の赤鬼と1体の青鬼を見る。<sup>303</sup>「2人の勇敢な黄金の大王達」と非常に豊富な仏教の空想力の完全なる動員でもって身の毛もよだつ様に誂えられた人間の形をした2体の像。1体の赤染めの像は雷神を表現していて手に金色の槌を持ち、背中に9つの輪形に連ねた幾つもの平らな太鼓を担って、稲妻を発する。もう1体の怪物は空色に塗られていて風神を表しており、石塊の上に座り背中に放り投げた風袋を手で閉じながら、我々を水晶で仕上げられた眼と悪魔のような顔つきで睨んでいる。青銅製の灯籠は家光が享受する崇拝を示している。

ここから直接に日光、より正確に言えば、鉢石<sup>はちし</sup>に向かい、泡立って流れている大谷川<sup>だいやがわ</sup>をもう一度通り過ぎた。両方の川岸は二つの橋で結ばれている。一方の橋は一般の交通の用を為しているが、他方の橋は御橋<sup>みばし</sup><sup>304</sup>と称し帝の為に留保されていて年に2回の神輿巡行

の際にだけ開かれる。仏僧の勝道上人が千年以上前に素晴らしい奇跡を起こした場所で、朱色に輝く橋が、岩を射抜いた鉄の橋脚の上に建てられ、架かっている。

街で私は品数が豊富な毛皮類の購入をした。この点では文化史的な名残を喚起した。1868(明治元)年の革命の前には他の事と並んで皮革加工や毛皮類等に従事する総ての人々は平民つまり一般的な民衆と異なり穢多あるいは不浄な者とされていた。つまり、それ以外の社会から排除され侮蔑された階級であったのだ。彼らは特定の部落や市区に追放されていたのだ。恐らくは仏教の影響に起因する身分なのだろう。これよりも下に非人、つまり人でない者があった。これは徳川期に初めて出来た階級の貧民であって、未開墾の地に定住する事だけが許されていた。在庫品の毛皮類の中には我々には未知である様なものを私は見出した。羚羊とか、猿とか、蝦夷<sup>305</sup>鳥の熊<sup>306</sup>とか、二種類の穴熊とか<sup>307</sup>、我々の所にいるものとは全く異なった種類の様に見える類とか、海豹とか、大きな栗鼠とかの、毛皮があった。黄鉛色と黄土色の間に變化した貂の毛皮や、毛皮から作られた屋内靴も入手可能であった。間もなく購入した商品を積込んで重くなった1台の人力車が我々のホテルに移動した。

日光の周辺の道路は、私が耳にしたところでは、追っている私の訪問を留意して大きな費用を費やして良好な状態に整備されたのであるから、私はこの犠牲を無駄にしない様に望んで、大雨にもかかわらず裏見の滝と称する滝への走行をする決心をした。通過する行路の景色の美しさは非常に賞賛されているのだが雨の為に残念ながら我々には何も見えなかった。傘の下から眺めながら近くの鮮やかな緑に光輝く草地と森林を愛でなければならなかった。この森林は多種多様の種類の樹木を示した。それで柏や楓もあったのだ。小さな集落や村落が、雨の為に非常に陰鬱な様子で、道端に所在していた。

我々の人力車夫達は滑り易くて軟弱な走路で困難な仕事を行って、一軒の茶屋のところで停まった。そこから我々は情緒に満ちた峡谷の上に向かって徒歩で行進を始めた。間もなく我々は滝の轟音を聞き遂に高く聳える岩に取囲まれた盆地に着いた。ここには15mの高さから溪流が岩壁の上からこちらに、見事な滝を作り出しながら、漏斗の形の池に水飛沫を飛散させている。岩壁の上から下への鋭い落差と岩壁が殆ど垂直である事の結果として大量の水が大きな弧を描いて落下するので、大きな危険を冒す事なく滝の下方の裏側に行くことが出来る。裏見の滝は、その性質が驚異に属するのではないが、狭隘な渓谷の枠内で、ともかくも、一見に値する光景を提供している。つまり、大地がここでは無数の巖や、割目や、穴から、急激に流れながら谷底の岩の上に落下する水を、表に湧出させているからだ。

滝の後方には一体の仏像があった。仏像の傍にその土地の行楽客が名刺を納めるのが習慣である。後世の訪問者に自分がここに居合わせたという賛嘆の念を引起す様な出来事を知らせる為にだ。ある場所を訪ねたという自慢は我々のところだけにはなく極東に於いてもふるさとを有する様に思える。ただし、我々のところで通常、壁や岩の外観を損ねて

いる落書より上品な形である。それ故に我々の国の旅人や観光客も日本の慣習を緊急に取り入れる事が勧められるのだ。

帰り道に、音を立てて流れている大谷川の川岸に魅力的に位置している小さな別荘のところで停車した。この別荘は三宮のもので、三宮は夏季にはここに滞在するのだ。私はここで三宮夫人と会った。彼女は長い期間をウィーンで過ごしドイツ語を完璧に使いこなすのだった。

100 対の石の仏像が両側に並ぶ道の傍らを通り抜けて我々は日光に帰った。まだ幾らかの買物をして、それから素晴らしい杉並木を人力車で通り抜ける為だ。私が、昨夜、日光に向かった際には夜の闇の中でしか見られなかったからだ。この木々の下では誇り高き過去の息吹が吹いている。目立つのは無数の双子の木々だ。それらは凡そ三分の一の高さのところで合体している。

悪意の気紛れを有する、非常に賞賛されている景観は、時々雨に包まれてだけ示される。最高の評判を享受しながら、過失が見つかって悪意ある人口によってひっくり返る危険が進行する人に似ている。私は日光に対して公正を期したい。日光は自分の魅力とその作用によって膨れっ面を示す事で確実に好意を得る 1 人の美女の様に振舞った。そして私に対して連続して膨れっ面をしたのだ。それにもかかわらず私は、私が受けた不十分な印象によって魅惑され、魅惑の総てを完成させる事が出来るのだ。日光の聖なる大地は晴れた夏の日の壮麗さによって与えられ、その魅惑を発揮する事が出来るのだ。

夜に我々はこの様な状況の下で最もましな事を行った。我々は機嫌を台無しにせずに、愉快に過ごす宴会をする事に一致した。その宴会では滑稽な話題が興味を添えた。その話題は日本側接待員の黒岡海軍大佐が愈々打ち解けてフランス語や、英語や、日本語の言葉を奇妙にごちゃ混ぜにして見事に話したのだ。陽気な娘達が我々にブラック・コーヒーを出した丁度その時に、雨の神が遂に機嫌を直し、花火が打上げられた。

## 8月22日、日光から横浜へ

無慈悲な鉄道当局が午前 5 時以外には横浜への特別列車を増発しようとしなかったの  
で、我々は日光にわかれを告げる為に間に合う様に起床し、午前 11 時には再び横浜駅に  
到着した。駅は街の北東の埋立られた場所に聳え立っている。

横浜は東京と同じく武蔵の国に位置し東京湾の西側に所在する一寒村から今日の重要港  
湾都市に成長したのは、1859 (安政 6) 年に条約によって開港を宣言され、その事でヨー  
ロッパやアメリカとの交易が始まったからだ。家康により開始され、その孫の家光によ  
って仕上げられた鎖国体制を抉じ開けた、名誉は当然アメリカ人に与えられるべきである。  
とりわけ 1854 (嘉永 7) 年にペリー提督によって指揮された遠征に結びつく。その遠征は  
アメリカとの交易の為の下田と箱館の開港によって完了した。それ以来、神戸、大阪、長  
崎、箱館、新潟、横浜が交易の為の条約港として全般的に、そして異邦人の居住に、開放



されたのだ。それで異邦人は当地では特に規定された街区に定住し、特別の許可なしで殆ど40kmの範囲で旅行する事が出来るのだ。ところで、横浜の場所について言うと、初めの頃には幾らか北に位置する神奈川<sup>308</sup>が条約港とされたのが、しかし、東海道の宿場である事で神奈川では、異邦人と旅行する大名の御供として道路を移動する侍たちとの間で、常に緊迫した紛争が生ずる恐れがあったので、横浜に変更されたのだ。この港は今日では総ての定期航路の結節点として条約港の中で第1の役割を果たしている。それらの定期航路は日本を一方ではヨーロッパと、他方ではアメリカと結んでいる。日本に寄港を望む殆ど総ての軍艦、多数の商船、総ての種類<sup>309</sup>の沿岸航行船の目的港としてだ。143,000人の人口を数える横浜は全く文字通り、日本が西方や東方と接触する中心、交易の出入の駅となっている。街の外観や住民の雰囲気<sup>309</sup>に現れている国際性もその事に由来するのである。

多大な費用を掛けて築かれた海岸通は港に沿って延びている。税関や商館、同様に、倉庫や荷捌き場が交易に資している。港からおよそ3kmの幅で外国人居住地が広がっている。1866(慶応2)年の火事の後により大きく、より華麗に再建された。幅が広くてよく維持管理された道路が通っていて、住宅や、銀行や、事務所や、倶楽部や、ホテルや、領事館が林立している。ところで多くの異邦人は横浜自体には商業活動の場のみを広げているが、自分の住居は街の西部を半円形に取巻く、断崖<sup>309</sup>と名付けられた、丘陵地帯<sup>309</sup>に建設されている。森林の空気を呼吸し港への美しい眺望を楽しむ為である。

主な人口構成要素は当然の事ながら日本人であるが、主にイギリス人とアメリカ人によって占められている異邦人集団は、都市生活の指導的要素としての街頭風景に於いて目に付く様になるには、十分に強力である。それで街を徘徊すると真っ赤に日焼けした異邦人達に出会う。大抵は軍艦から上陸した水兵達であって、この街で、長い航海から解放される為に探索しているのだ。

私は横浜に滞在する最後の日々には御忍びで滞在できる様に、従って日本側接伴員の案内を遠慮すると、頼んでおいたのにもかかわらず、私が横浜の周遊と買物の際に使用した人力車を、直ちに警察部長、1人の警察官、2人の新聞記者が追従し、街路で当然の事ながらセンセーションを引起した。この御供から自分を解放しようとした別の試みが無駄となってしまう後に、私は策略を用いて逃走を図った。つまり、グランドホテルに駆込んで朝食を摂った後に裏口から逃れて他の1台の人力車に乗ったのだ。しかし獲得した自由の喜びは長くは続かなかった。しかし警察はすぐに又もや走行中の私のところに来て、遂には全速力でやって来た。それで、今や、三宮に電話で助けを求めた。三宮もすぐにその場に来て私を願わざる御供から解放してくれた。しかし15分も過ぎないうちに、影の様に私の後を追う為に、この御供の連中は再び姿を現した。それどころか、私が購入した物の総てをこの御供の1人が注意深く記録していたのだと私は信ずるのだ。遂に私は艦上に急ぐことにした。そこに向かって航行中は警察組織の御供の無いのを喜ぶ為とはならなかった。彼らは小船に乗って私を追いかけて来たからだ。

私が探していた物の獲得に関しては横浜は好都合ではなかった。商店の数は無数であったにもかかわらずだ。日本の美術産業の本来の生産場所に、特に京都に、滞在した事で紛れもなく形成され洗練された、私の嗜好に合う物を見つけるのは本当に難しかった。横浜の商店は本来の意味の奇妙な物で満たされていた。それらの物は異邦人、特にアメリカ人を標的にしていた。彼らは可能な限り急いでこの国に特有の産物を獲得する為にのみ外出するのだ。そして、その様な需要が明らかに当地では、私の嗜好に合う様な物の生産を全く必要としない様に、影響を与えているのだ。私が何人かの商人にこの事についての私の意見を告げたところ、これらの商人は私が述べた意見の正しさを認めたのであるが、次の事を付言した。つまり、その種の安価な商品が、もし単に大きかったり、色彩豊かであったり、けばけばしかったり、唐草模様で飾られていたりすると、アメリカや、同様にイギリスへの、激しい売れ行きが生ずるだろうが、様式にかなひ、地味で、上品な、性質を持ち、それ故に高価な産物は少ししか需要がないだろうという事をだ。

夕方には我らの公使館と日本側接伴員の諸君を艦上での晩餐に招いていた。その席ではわが国の遣り方で総ての賓客が楽しい気分となったのだ。

### 8月23日、横浜から東京へ

午前中に私は又もや運が良い買物をしようと試みた。この度は親切なシーボルト男爵<sup>310</sup>に案内されてだ。シーボルト男爵は何年にも及ぶ日本滞在を通して総ての關係に於いて完璧に日本を熟知しているし、日本語も完璧に習得している。残念ながら私の骨折りは成功しなかった。それで私は、京都で手に入れていた様な、絹布と金襴緞子を見つけようとしたが空しい狙いであった。その様な生地はまず京都に注文しなければならぬと言うのが、私の求めに対する、至る所での返答であった。それとは逆に私は、艦上の動物園が、大きな鳥籠一杯の魅力的な白色の矮鶏と、尾羽の長さが数メートルある、既に非常に珍しい雄鶏、によって補足するのに成功した。また私は非常に可愛らしい二頭の熊を艦上へ送っておいた。二頭の熊はすぐに乗組員の人気者になって、短い間に後ろ足で立って前足を揃えて上げるのを習ったのだ。願わくは、二頭の熊が無事に我国に到着してコノピシュト城<sup>311</sup>の空堀に住んで城を華やかにせん事を。

私は午後再び東京に行きたくなったので、待伏せしている警察の眼を逃れる為に、クラム<sup>312</sup>とプロナイ<sup>313</sup>を直接に首府の東京に汽車で行かせた。東京では二人も千人の群集と、それに対応して動員された警官達の、御祭り騒ぎの歓迎を受けた。他方、私はシーボルトと終点の一つ手前の駅で下車し、人力車で東京へ急いだ。この策略もうまく行き、我々は何時間が全く妨げられる事なく移動する事ができ、美しい上野公園内のある料理屋で晩餐を摂った。

## 8月24日、横浜

残念ながら別れが近づいた。私が《エリーザベト号》艦上で過ごせる事ができる最後の日が始まった。というのは、私が乗船する予定である《エンプレス・オブ・チャイナ号》<sup>403</sup>は、今日の午前中のうちに横浜に入港していて、もう明日にはアメリカに向けて出帆する事になっていたからだ。荷箱やトランクは既に梱包されていたのだが、盆栽を買うために急いでもう一度上陸した。この目的を企てて1軒の大きな盆栽栽培業者を訪問した際には、盆栽の樹木の多様性と、個々の手本を矯めた畸形化の異体に関して、十分に眼を凝らす事はできなかった。私が購入した殆ど足首の高さに達しない様な松は、説明によると、50年以上の年齢に達しているとの事だった。

朝食は士官、下士官の先任者と会食し、午後の残りは、更なる旅の為の様々な事柄を処理しながら艦上に留まった。

明らかに間近に迫った旅立ちを思っ、日本に滞在してから初めて富士山の近くで、この特典、つまり、頭部が摩滅した円錐形である神聖なる山を全く清らかな環境の下で見る事を楽しんだ。

暗くなり始めた時に、士官達と下士官兵達が私に敬意を表して準備した、素晴らしい別離の祝典が始まった。工夫一杯に考え尽くされた行列の中で、我々が今回の旅行で訪問し見物した総ての国々と人々の代表者が、私の側を通過して行った。これまで非常に幸福に経験してきた旅を再現する生き生きとした光景を示したのだ。既にかかなり前から艦上ではこの祝典の諸準備が始められていたのだ。芸術家や職人が衣装や装飾等々をたっぷりと準備しなければならなかったのだ。それにもかかわらず秘密はかなり良く保たれた。そして、稽古の後に真黒な土人や日本人が艦載砲の間で見たのだ。

艦長が私を迎えに来た時には全士官が私の船室の前に集合していた。他方、行列に参加していなかった下士官兵達は甲板上に分隊毎に配置された。甲板は華やかに照らされていた。とりわけ、探照灯が鐘楼に向けて昼間の様に明るい光を照射していた。その鐘楼から行列が出て来たのだ。我らの有能な軍楽隊長がメドレー曲を作曲した。その曲のテーマ旋律は旅のそれぞれの局面を呼び覚ますのであった。可能な限り、それぞれの国の民族メロディーを入れたのだ。それで祝典行進は適切な様式の音楽で伴奏されて説明されたのだ。

ポートサイドからのエジプト人であるアラブ農民とヌビア人<sup>フエラ</sup><sup>314</sup>が行列の先頭となった。次に真黒なソマリア人とアデンからの伝統的なキルトを着用したきちんとした身形の英国兵が来た。セイロンはシンハリ人とカンディーからの多くの仏教僧を派遣した。インドは、美しい女性も見られた、一団の人々で代表された。この一団で最善の登場人物はマームッドの偽者、つまり、我々の従者マームッドの衣装とターバンを借用して驚くほどインド人に似て見えた、イビチツヒ兵曹と、我々が従軍司祭から借りた長い制服を借りて、可能な限り本物に見える様にそれに見合った太鼓腹を整えて、1人の金持のパールシー教徒<sup>315</sup>を演じた銃器整備兵であった。装いと武器で、非常に特徴を現して、実物どおりに、

真正の由来の品で装備を施して、ヌメア<sup>316</sup>のカナカ人とか、ソロモン諸島のパプア人とか、最後にはボルネオ島からのダヤク人<sup>317</sup>とかの、総ての島民達が行進した。オーストラリアからはアボリジニー<sup>318</sup>とか、農場主とか、大牧場主とか、山賊とかが現れた。非常に機知に富んでいたのは長く待ち焦がれた郵便物の香港への到着が、大声を上げる郵便馬車の馭者を通して描かれた。神国の後裔である、辮髪<sup>べんぱつ</sup>の支那人がチョコチョコと二人で通り過ぎた。続いたのは大勢の着物を着用した日本人男性と娘達であった。様々な日本の楽器を持っていたが、幸いな事に、演奏はされなかった。小柄なチロル人は、既に赤道祭の際にアンピトリテ<sup>319</sup>として女性の役割で参加していたのだが、ここでもまた、娘として可愛い印象を与えた。

行列を締め括っていたのはツァムベアリン兵曹長だ。右手に旗を持って、20人の大柄で最も強そうな水兵達を従えて堂々と行進した。彼は私の前で停止し、旗を高く掲げ、私に実に愛国的な内容の挨拶をした。その中で彼が表明したのは、《エリーザベト号》で御一緒させて頂いた旅は幸福な終焉を迎えた。我々の海軍はどの様な場合に於いても、海軍に向けられた期待を果たす為に、最善を尽くすであろう。もし、我らが天壤無窮<sup>てんじょうむきゅう</sup>の大元帥陛下が各民族<sup>320</sup>に戦闘を呼びかける様な事があれば、海軍は皇帝と祖国の為に血を以って、絶えず、皇帝旗と軍艦旗を守り、名誉を保ち、責任を履行するであろう、という事であった。この勇敢なる男は私に対する万歳で以って演説を終えた。私は涙が出るほど感動した。彼が、素朴なやり方ではあっても、心から感激して話したからだ。我々の誰もが感じたのは、ツァムベアリンが正に自分が感じたままを話したと言う事だ。彼の言葉は愛国的に考える兵士とオーストリア人のだれもの言葉なのだ。我が海陸軍に於いては、常に実直さと有能さによって下士官を教育し維持するのが望ましいのだ。その様な実直さと有能さをツァムベアリンが心を正しく持っている者達に際出させたのだ。これらの人々は自分たちの指揮官達を守護し、若き下士官兵の輝ける手本であるのだ。確実なのは基礎的な教育と多量の知識が必要だと言う事だ。それによって、兵士はどの様な場合にも義務を履行しようとするのだ。しかし、この事だけでは充分ではない。敵に対して後ろを見せぬ為には、下士官兵に対しては、何よりも義務の履行を信念とさせねばならないのだ。

それから私は祝典行列の参加者全員を閲兵した。その際に、下士官兵の個々人で海陸への様々な探検に於いて私の近くに居た者達を仮装した状態で再び見分けるのに、しばしば苦勞したのだ。特に真黒な土人達の場合は本人を特定するのに少なからぬ困難を呈したのだ。祝典行列の構成は単に調和が取れていただけではなくて、細目に関してもまた、非常に見事であった。その事を個々の登場人物や個々の集団をより近くで見物する事で納得させられたのだ。私に喜び齎<sup>たま</sup>す事と、私が見事な旅の光景の再現を心に留めて楽しく記憶するだろう事を、思っ、この祝典を演出した人々には、費やされたものへの、つまり、本<sup>うめあわ</sup>当に少なからぬ骨折りへの、埋合される事だけを私は願うのだ。

士官達が私を招いてくれた晩餐は、趣向を凝らして庭園に転化された甲板上で開催され

た。今日、最後に私達が過ごした場所で、我々が周航したあらゆる地域で、我々が正に経験したよき日も悪しき日も、士官諸君とこれまで何度も一緒に、快い雑談の中で様々な見解や、印象や、気持ちを交換したり、愛する、遠き故郷を思ったりしたのだ。

武人が食事を共にする際には何処でも行われる様に、国歌の壮嚴なる響きの下に天壤無窮の大元帥の多幸を祈って最初の乾杯をした。それから艦長が私に対して温かく感じられた挨拶をした。その挨拶は私の胸に迫って、私はもう明日には《エリーザベト号》を退艦し士官諸君と別れねばならないという、思いが私を深く感動させた。我らの素晴らしい海軍に対して総ての行動が今までの旅と同様に成功する様にとの望みと、士官諸君に対し誠実に義務を成し遂げたとする思いで幸福な帰国ができる様にとの願い、を結び合わせて、心からの感謝を表現する事で返答としたのだ。

晩餐の場で私は士官達から気の利いた贈物を貰って吃驚させられた。1枚の絵を贈呈されたのだ。その絵は美術に熟達したランバルク<sup>321</sup>の手で描かれたのだ。訪問した国々の一連の光景の範囲で旅程が分かる様に世界地図が描かれている。水彩で製作された絵は適切な見解と技術的な完璧さによって抜群であり、この芸術家の非凡な才能に対する輝ける証明となっている。(完)

## (註)

- 283 現在では2,484mとされている。
- 284 空海上人が入山した際に男体山の別称二荒山を音読し日光山とした。輪王寺の山号。
- 285 徳川幕府の初代将軍、徳川家康
- 286 徳川幕府の三代将軍、徳川家光
- 287 日光山輪王寺。現在、日光の東照宮(神道)と日光山輪王寺(仏教)は分離されているが、明治維新までは一体のものであり神仏混淆の施設であった。江戸末期から高まった神国思想が明治維新によって最高潮に達し全国的に廃仏毀釈が強力に推進された結果、神仏分離が行われた。その結果、本来は同じ境内にあった建物が無理やり神道と仏教に分離されているのである。
- 288 この年に勝道上人が大谷川北岸に二荒山大神を祀り本宮神社を創建したが、その1年前の766(天平神護元)年に四本龍寺を創建したのが日光山の起源とされる。
- 289 石鳥居
- 290 福岡城主、黒田長政、1568(永禄11)年~1623(元和9)年
- 291 五重塔
- 292 仁王門は仏教寺院の門なので、神道の東照宮では表門と呼ばれている。
- 293 麒麟
- 294 三神庫と呼ばれ、上神庫・中神庫・下神庫からなっている。
- 295 御水舎
- 296 護摩も仏教に属する修法なので、神道となった結果、現在は祈祷殿と呼ばれる。
- 297 神輿舎
- 298 豊臣秀吉と源頼朝
- 299 栃木県令が日光の2社1寺を東照宮・輪王寺・二荒山神社に分離する様に指令したのは1871(明治4)年1月9日である。
- 300 仏像、舍利、経巻を安置する仏具。正面に両開きの扉をつける。
- 301 狛犬

- 302 松平容保、1835（天保6）年～1893（明治26）年、幕末の会津藩主、京都守護職として公武合体に尽力し尊皇攘夷急進派の長州藩を一掃したが、鳥羽伏見の戦いに敗れ、最後の將軍徳川慶喜と共に江戸に逃れた。会津戦争で官軍に抗戦したが降伏、後にゆるされ東照宮宮司となる。
- 303 仏教では風神、雷神は千手観音の眷属としての二十八部衆と共に安置される。
- 304 原文ではMihaschiと書かれている。大谷川に掛かる神橋の事。朱塗りの木橋で元は勅使や將軍の専用であった。
- 305 北海道の旧称
- 306 北海道に住む蝦夷エゾ、本土に住む熊は月の輪熊
- 307 原文ではDachsen（複数3格）と書かれている。Dachsとは穴熊の事だが、ここでは狸タヌキの事か？もう一種類とは狐か。ただし、ドイツ語で狐ウツはFuchsと言うのだが。
- 308 現在の神奈川県横浜市神奈川区
- 309 横浜市の山手地域
- 310 アレキサンダー・ゲオルク・グスタフ・フォン・ジーボルト、1846～1911、日本で著名のフィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト（1796～1866）の息子。1859年父の再度の訪日に従って長崎に渡来し、日本語を学ぶ。駐日英国大使館の通訳官を勤めた後に日本政府に勤務。駐独日本大使館書記官、井上馨外相秘書官等を勤め条約改正の為に日本外交に貢献。イタリアで歿。
- 311 フランツ・フェルディナントの居城。現在はチェコ共和国内にあり、博物館となっている。
- 312 ハイน์リッヒ・クラム＝マルティニック伯爵、フランツ・フェルディナントの随員で、槍騎兵第1聯隊付予備中尉、侍従
- 313 ユリウス・プロナイ・フォン・トート＝プロナ・ウント・プラトニツァ、フランツ・フェルディナントの随員で、騎兵第11聯隊付中尉、侍従、御付武官
- 314 アフリカ北東部、エジプトのアスワンからスーダンのハルツームに到るナイル川流域に住む主としてハム系の種族。
- 315 インド在住のゾロアスター教徒。8世紀にイラン在住のゾロアスター教徒の一部が8世紀にイスラム教徒に追われインドに移住。17世紀に彼らの居住地にイギリス東インド会社の商館が置かれ、多数のパールシー教徒が商業や貿易行に従事。18世紀に東インド会社がボンベイに移ると多くがボンベイに移住。19世紀になるとインド有数の民族資本を興す。現在のタタ財閥はパールシー教徒の代表的存在。
- 316 フランス領ニューカレドニアの首府。
- 317 ボルネオに住むフロト・マレー系諸民族に対する総称。
- 318 オーストラリアの原住民。
- 319 ギリシャ神話で海神ポセイドンの妻、海の女神。
- 320 オーストリア・ハンガリー帝国はハプスブルク家がオーストリア皇帝とハンガリー国王を兼ねた多民族国家であり、公用語はドイツ語とハンガリー語以外に10の言語からなっていて、銀行券には12の言語が印刷されており、軍隊の指揮語はドイツ語ではあったが、その操典類は12の言語で印刷発行されていた。
- 321 海軍少尉候補生、アウグスト・フォン・ランベルク男爵

#### 参考文献一覧（続）

- 67) 岩波書店編集部編、『岩波西洋人名辞典 増補版』、岩波書店、1981年刊

## Erzherzog Franz Ferdinands Japan-Besuch 1893 (Teil 4c)

Hajimu WATANABE

*Graduate School of Science and the Humanities,  
Kurashiki University of Science and the Arts,**2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received October 1, 2009)

Am 20. August fuhr Erzherzog Franz Ferdinand nach dem Besuch eines japanischen Theaters vom Ujeno-Bahnhof nach Nikko ab. Um 11 Uhr nachts war er in Nikko angelangt, wo ungeachtet der vorgerückten Stunde Neugierige in großer Zahl den schier endlosen Zug von Dschinrickschas anstaunten.

Am 21. August besuchte er vorerst seit früh vormittags einen lieblichen buddhistischen Tempel, dann die schintoistische Tempelanlage. Weiter besuchte er die Gräber von Iejasu und Ijemitsu. Nachher wandte er sich dem Einkauf von Pelzwaren im Städtchen zu. Danach besichtigte er das Urami-go-Taki im Regen. Abends tat er, was unter den Umständen das Geratenste war; er ließ sich die Laune nicht verderben und vereinigte seine Suite zu einem heiter verlaufenden Diner.

Am 22. August mußte er früh um 5 Uhr von Nikko abfahren und kam in Jokohama um 11 Uhr an. Obschon er gebeten hatte, ihm während der letzten Tage seiner Anwesenheit in Jokohama einen Inkognito-Aufenthalt zu ermöglichen, folgten dem Rickscha, dessen er sich bei seiner Wanderung durch Jokohama und bei der Besorgung von Einkäufen bediente, doch sofort der Polizeipräfekt, ein polizeilicher Beamter und zwei Reporter. Schließlich eilte er an Bord, nicht ohne sich während der Fahrt dahin der Begleitung eines Polizeiorganes zu erfreuen, das ihm in einer Barkasse nachzog. Abends hatte er die Herren seiner Gesandtschaft sowie jene der japanischen Suite zu einem Diner an Bord geladen.

Am 23. August nachmittags wollte er wieder in Tokio sein. Sein Manöver, um den lauernden Augen der Polizei zu entgehen, gelang. Er konnte sich durch einige Stunden ganz unbehindert bewegen und ein Diner in einem Restaurant des schönen Ujeno-Parkes einnehmen.

Am 24. August war der letzte Tag, den er auf der »Elisabeth« verbringen konnte, angebrochen; denn schon am nächsten Tag soll die »Empress of China« auf der er sich einzuschiffen gedenkt, und welche im Laufe des Vormittages in Jokohama eingelaufen ist, nach Amerika abgehen. Als es dunkel zu werden begann, nahm ein großartiges Abschiedsfest seinen Anfang, welches die Herren des Stabes und die Mannschaft ihm zu Ehren arrangiert hatten. Nach dem Fest befand sich ein letztes Diner auf dem Eisendecke, zu welchen ihm der Schiffsstab geladen hatte.